



地域に貢献し、地域で学ぶ活動
教養C群サービスラーニング科目

2022年度 シチズンシップ・スタディーズ 活動報告会 資料集

立命館大学サービスラーニングセンター
衣笠 有心館1階

Tel: 075-465-1952 / Fax: 075-465-1982

B K C アドセナリオ1階

Tel: 077-561-5910 / Fax: 077-561-5912

O I C A棟1階AN事務室

Tel: 072-665-2195 / Fax: 072-665-2059

(窓口時間：平日 10:00～17:00)

サービスラーニングセンターE-mail: ritsvc@st.ritsumei.ac.jp

サービスラーニングセンターHP: <http://www.ritsumei.ac.jp/slc/>

目次

はじめに

シチズンシップ・スタディーズとは	P.2
活動報告会 次第	P.3
次第【プレゼンセッション時間割】	P.4

発表資料

時代祭応援プロジェクトA	P.5~6
時代祭応援プロジェクトB	P.7~8
時代祭応援プロジェクトC	P.9~10
堂本印象美術館広報プロジェクト	P.11~12
衣笠キャンパスプロジェクト	P.13~14
京北WSプロジェクトA	P.15~16
京北WSプロジェクトB	P.17~18
京北WSプロジェクトC	P.19~20
草津宿本陣「年越し大作戦」実行プロジェクト	P.21~22
草津ブランド新商品開発プロジェクト	P.23~24
若者の投票率向上に向けた模擬投票イベント	P.25~26
草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト	P.27~28
茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	P.29~30
フードパントリー茨木Ritsプロジェクト	P.31~32
障害者ガイドヘルパー版「るるぶ」をつくろう！	P.33~34
団地生活の活性化 ～まちづくりの面白さを知ろう～	P.35~36
国際理解教育外国人 サポーター派遣事業	P.37~38

報告会に寄せて （担当教員からのメッセージ）

自己完結せず、満足しつつ、地域に貢献を（山口 洋典 先生）	P.39
古民家再生という課題から社会の協創に向けて（景井 充 先生）	P.40
「ガクチカ」になりましたか？（小辻 寿規 先生）	P.41
複雑さへの感度を上げる（秋吉 恵 先生）	P.42

シチズンシップ・スタディーズとは

ーボランティア活動を通して地域で学ぼう！ー

「シチズンシップ・スタディーズ」は、2020年度まで開講してきた「シチズンシップ・スタディーズI」での経験を基盤に、学生実態に合わせて2020年度教養改革で、半期科目として設置した立命館大学サービスラーニングセンターが開講する正課科目です（課外活動ではありません）。この授業は、受講生がボランティア活動を通じて地域に貢献しつつ、地域社会の一員としての自覚と能力を育み、専門知識の応用的な理解を深めることを目標としています。

ボランティア活動は、大学のキャンパス内だけでは得られない、かけがえのない経験を受講生にもたらししてくれます。さらに、地域で活動を行うことは、自らが暮らす地域をこれまでとは違った視点で捉えることを可能にするだけでなく、大学で学ぶ知をいかに地域で活かせるかを学ぶ契機となります。ボランティアプログラムの開発・運営にあたっては、大学やサービスラーニングセンターが地域や海外等も含めた行政、公的機関、NPO、地域組織などと協定（覚書）を締結した上で実施します。ボランティア活動の期間は、数日程度の短期で行うものから、数ヶ月程度の長期で行うものまでさまざまです。受講生が自身の興味や関心に沿って、参加するボランティア活動を選択することができます。

ボランティア活動の魅力を体感しながら、大学で学ぶ知に生きた風を呼び込んでください。

ーボランティアだけど奉仕活動じゃない。授業だけど講義じゃない。

それがサービスラーニング！ー

「シチズンシップ・スタディーズI」は、「奉仕活動」ではなく「ボランティア教育」プログラムです。ボランティア教育とは、体験的学習の一形態で、ボランティア活動を中心に事前・事後の学習（研修・振り返り）を組み、明確な教育目的に基づいて行われる教育プログラムです。よって、ボランティア活動を通じて、他者や地域（コミュニティ）の役に立つだけでなく、そこから学習効果を得られるよう設計されます。この点が、純粋な「奉仕活動」との違いです。単にボランティア活動に参加すれば、単位が認定されるというわけではありません！ボランティア活動を通して何を学びたいのか、確かな問題意識をもって取り組むことが重要です。

また、このような教育手法は、欧米ではサービスラーニング(service-learning)またはコミュニティサービスラーニング(community service-learning)と呼ばれています。

2022年度実施プロジェクト・プログラム一覧

2022年度は、下記の地域団体にご協力いただき、80名の受講生を受け入れていただきました。

キャンパス	クラス名	プロジェクト名	受入団体名	担当教員
衣笠	GA	時代祭応援プロジェクト	平安講社 第八社	山口 洋典
		堂本印象美術館広報プロジェクト	京都府立 堂本印象美術館	
		衣笠キャンパスプロジェクト	立命館大学 衣笠キャンパス地域連携課	
	GB	京北WSプロジェクト	京北WSプロジェクト	景井 充
BKC	G1	草津宿本陣「年越し大作戦」実行プロジェクト	草津市（教育委員会）	小辻 寿規
		草津ブランド新商品開発プロジェクト	草津市（商工観光労政課）	
		若者の投票率向上に向けた模擬投票イベント	草津市（選挙管理委員会）	
		草津市×立命館 大学生のまち応援プロジェクト	公益財団法人 草津市コミュニティ事業団	
OIC	GV	茨木みずとわプロジェクト～持続可能な食を考える～	一般社団法人 みずとわ	秋吉 恵
		フードパントリー茨木Ritsプロジェクト	フードパントリー茨木	
		障害者ガイドヘルパー版「るるぶ」をつくろう！	特定非営利活動法人 み・らいず2	
		団地生活の活性化 ～まちづくりの面白さを知ろう～	茨木市社会福祉協議会	
		国際理解教育外国人 サポーター派遣事業	公益財団法人 大阪府国際交流財団	

活動報告会 次第

【開催日時】 2023 年1 月15 日（日） 13：00～16：10

【開催場所】 立命館大学 大阪いばらきキャンパス B棟374(コロキウム)

【スケジュール】

時間	プログラム
13:00～13:15	オープニング
13:15～13:35	第1セッション
13:40～14:00	第2セッション
14:05～14:25	第3セッション
14:25～14:35	休憩
14:35～14:55	第4セッション
15:00～15:20	第5セッション
15:25～15:50	受入先講評（各団体3分程度）
15:50～16:05	教員講評
16:05～16:10	事務連絡（レポート提出等について）

活動報告会 次第

【プレゼンセッション時間割】

チーム コード	プレゼンチーム名	セッション 1	セッション 2	セッション 3	セッション 4	セッション 5
GA_1	時代祭応援 プロジェクトA	発表	発表	発表	発表	発表
GA_2	時代祭応援 プロジェクトB	発表	発表	発表	発表	発表
GA_3	時代祭応援 プロジェクトC	発表	発表	発表	発表	発表
GA_4	堂本印象美術館 広報プロジェクト	発表	発表	発表	発表	発表
GA_5	衣笠キャンパスプロジェクト	×	発表	発表	発表	発表
GB_1	京北WSプロジェクトA	発表	×	発表	×	発表
GB_2	京北WSプロジェクトB	×	発表	×	発表	×
GB_3	京北WSプロジェクトC	発表	×	発表	×	発表
G1_1	草津宿本陣「年越し大作戦」 実行プロジェクト	発表	発表	発表	発表	発表
G1_2	草津ブランド 新商品開発プロジェクト	発表	発表	発表	発表	発表
G1_3	若者の投票率向上に向けた 模擬投票イベント	発表	発表	×	×	発表
G1_4	草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト	発表	×	発表	発表	発表
GV_1	茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～	発表	発表	発表	発表	発表
GV_2	フードパントリー茨木RIt's プロジェクト	発表	×	発表	×	発表
GV_3	障害者ガイドヘルパー版 「るるぶ」をつくろう！	発表	発表	×	発表	×
GV_4	団地生活の活性化 ～まちづくりの面白さを知ろう～	発表	発表	発表	発表	発表
GV_5	国際理解教育外国人 サポーター派遣事業	×	発表	発表	発表	×

※当日の状況により、一部変更する場合があります。

2022 年度時代祭応援プロジェクト

時代祭①時代祭班：北岡・仲川・ファン・馬・吉田・若月

1. プロジェクト概要

1-A. 時代祭応援プロジェクトとは

平安講社第八社でのフィールドワークを通して、地域の実情や課題を体験的に学ぶ

1-B. 受入団体について

- ・時代祭の運営を担う市民団体「平安講社」の一つである平安講社第八社
- ・大正 10 年（1921 年）に組織された

2. 時代祭とは

- ・毎年 10 月 22 日に平安神宮で行われる京都三大祭の一つ
- ・時代装束姿の京都市民約 2000 人が 20 の時代列に分かれ、時代をさかのぼり行進

3. 活動スケジュール

	プロジェクト活動	地域活動	自主企画活動
9 月	入隊式・練習補助	防災授業	
10 月	練習補助・平安神宮オリエンテーション・衣装仕分け・宣状式・時代祭本番・衣装戻し	防災授業・地域防災会議見学・夜回り・あかしやふれあい秋祭り運営手伝い	
11 月	成果目標決定	防災授業・地域防災会議見学・夜回り・防災訓練手伝い	冊子作成
12 月		地域防災会議見学	インタビュー・冊子作成
1 月	活動報告会		冊子完成予定

2. プロジェクト活動

1. 入隊式、練習開始（9 月 20 日）

- ・歩き方、鉄砲の持ち方、草鞋及び衣装の着方

2. オリエンテーション（10 月 2 日）

- ・平安神宮内を見学、時代祭の始まった背景と歴史についての説明

3. 衣装渡し（10 月 19 日）

- ・時代祭で使用する隊士の衣装状態確認・サイズ分け

4. 時代祭前日準備 (10月21日)

- ・駐輪場の案内状及び駐車制限状の付着、時代祭で使用する祭具の準備

5. 時代祭本番 (10月22日)

- ・男性受講生：維新勤王隊として西ノ京公園から出発→平安神宮へ
- ・女性受講生：時代祭の参列

3. 自主企画活動

1. 目標設定

成果目標	行為目標
時代祭応援プロジェクトを通して私たちが学んできたことを、来年度以降の受講生が知ることができる。結果、来年度以降の受講生が時代祭の重要さと地域の思いを事前に知った上でプロジェクトに参加し、質問のクオリティが上がるとともに地域の人と同じ質問に答える負担の低減につながる。	1, 私たちの学びを纏めた冊子を作成 2, サービスラーニングセンターと連携し、次の受講生が読めるよう手配

2-A. 来年度以降の受講生（時代祭応援プロジェクト）向けの冊子作成

背景：受講生の学びが引き継がれていない

目的：学びを引き継ぎ、次年度の受講生がより深い気づきや疑問を持つ

内容：私たちが授業を通して学んだ内容を纏めた冊子の作成

現状：来年度、サービスラーニングセンターを介し配布予定

2-B. 反省と学び

反省	学び
・現場への波及効果の検討不足 ・手段と目的が逆	・ニーズを踏まえること ・多様な角度から検討すること

4. まとめ

- ・サービス・ラーニングを通して学んだこと→実際に体験し、生の声を聞くことの重要性
- ・時代祭の役割→異なる世代間の交流の発生、若者の自治意識形成の機会
- ・地域の方々のニーズを捉える必要性→冊子作成によって、もたらされる成果が曖昧

2022 時代祭応援プロジェクト報告会レジュメ

時代祭②地域班(防災)：梅澤・桂・西岡・宮崎・森永・山本・若月

1. プロジェクト概要

1-A. 時代祭応援プロジェクトとは

平安講社第八社でのフィールドワークを通して、地域の実情や課題を体験的に学ぶ

1-B. 受入団体について

- ・時代祭の運営を担う市民団体「平安講社」の一つである平安講社第八社
- ・大正 10 年（1921 年）に組織された

2. 時代祭とは

- ・毎年 10 月 22 日に平安神宮で行われる京都三大祭の一つ
- ・時代装束姿の京都市民約 2000 人が 20 の時代列に分かれ、時代をさかのぼり行進

3. 活動スケジュール

	プロジェクト活動	地域活動	自主企画活動
9 月	入隊式・練習補助	防災授業	
10 月	練習補助・平安神宮オリエンテーション・衣装仕分け・宣状式・時代祭本番・衣装戻し	防災授業・地域防災会議見学・夜回り・あかしやふれあい秋祭り運営手伝い	
11 月	成果目標決定	防災授業・地域防災会議見学・夜回り・防災訓練手伝い	冊子作成
12 月		地域防災会議見学	インタビュー・冊子作成
1 月	活動報告会		冊子完成予定

2. プロジェクト活動

1. 入隊式、練習開始（9 月 20 日）

- ・歩き方、鉄砲の持ち方、草鞋及び衣装の着方

2. オリエンテーション（10 月 2 日）

- ・平安神宮内を見学、時代祭の始まった背景と歴史についての説明

3. 衣装渡し（10 月 19 日）

- ・時代祭で使用する隊士の衣装状態確認・サイズ分け

4. 時代祭前日準備（10 月 21 日）

- ・駐輪場の案内状及び駐車制限状の付着、時代祭で使用する祭具の準備

5. 時代祭本番（10 月 22 日）

- ・男性受講生：維新勤王隊として西ノ京公園から出発→平安神宮へ
- ・女性受講生：時代祭の参列

3.自主企画活動

1.目標設定

成果目標	行為目標
立命館大学生が、防災を通じて、地域参加に興味を持つようになる	私たちが、衣笠キャンパス所属の大学生を対象に、防災のことにに関して知らせる冊子を作成する

1. 企画内容「防災冊子」の作成

背景：防災に興味や危機感を持っている人が少ない。

目的：大学生に防災を自分事として捉えてもらい、地域活動に参加してもらうきっかけを作る。

内容：①防災の重要性を伝える漫画

②在宅避難について

③一人暮らしの大学生を対象にした防災情報を提供

④地域参加のきっかけとして、1/29の防災イベントの広報

展望：冊子を読んだ学生に、防災を自分事のように捉えてほしい。そして、1/29の防災イベントを地域参加の第一歩として参加してもらいたい。

2. 反省と学び

反省	学び
① グループ内の情報共有不足	① グループ内の細かな情報共有の必要性
② 意見交流が図れなかった	② 定期的なミーティングによる認識のズレの修正
③ 先を見通して動かなかった	③ 計画的にプロジェクトを実行する重要性

3. 今後のスケジュール

○1/17 学生防災サークル 立命館 FAST との共同防災イベントの開催

→防災冊子の配布

○1/29 北消防署による防災講習会への参加

4. まとめ

- ・サービ斯拉ーニングを通して学んだこと→大学生が地域に活動していくことの重要性

時代祭応援プロジェクト・地域活動班活動報告

時代祭③__地域活動班

浅田菜奈子

北城帆香

木村明日海

岩崎叶音

市原春香

はじめに

時代祭応援プロジェクトは3つのグループに分かれており、その中の地域活動班を選択
地域活動班では、シチズンシップ・スタディーズを受講して学んだことを記録として残すために、
冊子を作成

1. 時代祭プロジェクトとは

- ・時代祭をはじめとした地域活動に参加し、地域活動が市民にとってどんなものであるかを学ぶ
- ・授業を通じて、地域住民の一人としてできることは何かを考える

① 時代祭の説明、時代祭応援プロジェクトの活動

- ・ 受け入れ先：平安講社 第八社

時代祭では維新勤王隊列を担当

- ・ できること

- ①京都の歴史・文化を深く学ぶことができる
- ②地域住民との協働作業を通じて、地域社会の現状や課題を知ることが出来る
- ③異なる異年齢との出会いや作業を通じて、対人関係力を鍛えることができる

時代祭とは・・・

平安遷都 1100 年を記念して明治 28 (1895) 年に始まった、祇園祭・葵祭と並ぶ京都三大祭の一つ。平安遷都の日である 10 月 22 日に毎年開催される(雨天順延)。2022 年度はコロナ禍により 3 年ぶりの開催であった。

明治維新時代から平安京の造営された延暦時代まで、約 2000 人の市民が、時代時代のスタイルに扮して、京都のまちを練り歩く時代風俗行列がみどころ。

2023 年 1 月 15 日

時代祭プロジェクト活動スケジュール

9/20(火)	入隊式
9/21(水)～	隊士練習受付計 19 回
10/2(日)	オリエンテーション
10/9(日)	衣装渡し
10/10(月)	白丁着付け
10/15(土)	宣状式
10/21(金)	時代祭前日準備
10/22(土)	時代祭
10/30(日)	衣装戻し

2. 地域活動班地域活動の説明

①地域活動について

▶主な地域活動

- ・防災 例) 防災会議、消防団
- ・その他 例) 祭りの運営

▶地域活動から学んだこと

- ・災害時は地域による活動が必要不可欠
- ・地域の方はフレンドリー

② なぜ地域活動に興味を持ったか

- ・コロナ禍の中、一人暮らしが始まり不安を抱えていたが地域の方の言葉で勇気づけられることがあった。このような地域を増やすにはどうしたらよいか考えるようになった。
- ・市民にとっての地域活動がどのような存在であるのか、どんな役割を果たしているのか学びたいと思った。

② 冊子を作った理由

完成した冊子を平安講社第八社の方、来年度以降の受講生にご覧いただき、今年の受講生が学んだことを知っていただく

2. 最後に

気づいたことや学んだことを冊子にすることで、2022 年度の受講生が学んだことを資料として残すことができる点に意義があると考え、冊子を作成した。

2022年度堂本印象美術館広報プロジェクト

今泉、上田、清水、澁谷、菅野、滝川、宮本

・京都府立堂本印象美術館とは

京都で活躍した日本画家・堂本印象によって設立され、昭和41年(1966)10月に堂本美術館として開館。平成3年(1991年)に建物と作品が京都府へ寄贈され、翌年の平成4年(1992)、京都府立堂本印象美術館として開館して現在に至る。立命館大学衣笠キャンパス正門前に位置し、小さい規模ながらも魅力的な美術館である。

・堂本印象美術館広報プロジェクトとは

活動テーマ：美術館を知らない人のためにアートの魅力を発掘する

主な内容：美術館に来る機会がない人や、美術館の楽しみ方に悩む人へ美術館に来てもらえるよう Instagram、Twitter を活用した美術館の広報活動を行う。

・活動スケジュール

10月	内覧会（山口華楊展・野外工芸美術作家展）に参加（7日） プロジェクト内容の確認と堂本印象美術館の学習(14日) SNS ごとの方向性の確認と投稿計画の作成(18日) 投稿記事と配信スケジュールの決定(25日)
11月	SNS 記事の作成、校正、投稿(1日~15日) 投稿した記事の効果測定と振り返り(22日)
12月	活動報告会に向けての準備
1月	活動報告会(15日)

・目標設定

成果目標：堂本印象美術館の来館者を増やす

行為目標：SNS を使った広報活動を通して、堂本印象美術館の魅力を発信する。

投稿内容（一例）	媒体	企画意図	作成内容	閲覧数
堂本印象美術館 vlog	Instagram	近くの観光地とともに紹介することで、美術館の存在を観光客に身近に感じてもらうため。	撮影日は天気がすごく良かったので、外の展示場所の撮影では太陽の光を最大限に生かしたアングルを意識した。ただ動画は編集がとても大変だった。	357
山口華楊作品 『仔馬』の紹介	Twitter	展覧会開催中の山口華楊の作品と描き手の想いを知ってもらう。	山口華楊著の本から作品への想いを抜粋した。作品の雰囲気や壊さないような背景の色を選択した。	317
美術館鑑賞方法	Instagram	学生独自の鑑賞方法を提示し、海外の方にも新しい美術館の鑑賞方法を知ってもらう。	日本語と英語で山口華楊展での学生それぞれの鑑賞方法を紹介する。	616

・新しい SNS 運用に関する企画提案

○美術館の投稿をリツイートとフォローしたアカウントの中から抽選でオリジナルグッズや招待券をプレゼントするキャンペーンを実施する。

【投稿内容】

・新しい展覧会開始までのキャンペーンかつ広報として、美術館や作品についての説明を行う。

- ・プレゼントキャンペーンのツイートのリツイートと美術館アカウントのフォローによって応募の完了とする。
- ・景品候補は、1.好きなポストカード（投票参加者の意見を拾う）、2. 美術館への無料入場券、割引券、3. 無料入場券（3名まで）と美術館のグッズ（バッグ or マスキングテープ・ポストカード）など

【目的】

- ・フォロワー増加とリツイートにより美術館への認知度を向上させ、来館者増加を図る
- ・美術館を知らない人にも景品の招待券の配布等を通じて興味を持ってもらい、新規来館者の獲得を図る。

○その他のイベント企画

テーマ	媒体	目的	作成内容
堂本印象美術館×京都鉄道博物館のコラボ企画	イベント Twitter Instagram	来館者の年齢層が高い堂本印象美術館と若年層の来館が多い京都鉄道博物館のコラボ企画を通じて、新規来館者増加を狙う。	鉄道に関する作品の展示 スタンプラリーの開催
夜の堂本印象美術館の開催	Twitter	SNS の宣伝と来館者自身による美術館の来館後の感想の発信を通じて新規来館者の獲得を狙う。	クリスマスの美術館来館に関するアンケートの投稿とフォロー&リツイートキャンペーンなどの宣伝を行い、その後夜間開館を実施。照明を暗くし、普段とは違う美術館の雰囲気を感じてもらおう。
堂本美術館×SNS でみんなにやさしい館内マップの制作	Twitter Instagram	展示物や作品を掲載した美術館のマップを作り、それをSNS 上でも発信し、興味を持ってもらうきっかけにする。また周辺の美術館と連携し、相互に宣伝しあうなどして美術館の広報を盛り上げる。	SNS でのマップの情報配信・ワードクラウドを用いる・スタンプラリー（周辺の美術館との景品付きコラボ）

○企画の実行とそれに予想される結果

【企画】

フォロー&リツイートでのプレゼントキャンペーン

【キャンペーンの効果】

リツイート数が約61.5倍（※）になることが見込まれる。

※他の美術館や他の会社の公式アカウントが実施したプレゼントキャンペーン企画のリツイート数が普段の投稿のリツイート数の何倍になっているかを計算して平均値を出したもの。

よって、この企画を実施するとおおよそ

リツイート数2→123 フォロワー数476→597

に増加すると思われる。

〔参考にしたアカウント〕

あべのハルカス美術館/ルートヴィヒ美術館展/ヨドバシカメラ/エディオン/スシロー/セブンイレブン/ドンキホーテ/ジルスチュアート/ビッグカメラ/バンダイナムコ（集計に用いた投稿は12月26日の時点で終了している最新のもの）

フジバカマ衣笠キャンパスプロジェクト

チームメンバー:横山光希 奥野泰生
大竹美緒 井出 晴仁

～目次～

1. 活動について
2. 目標の設定およびその達成
3. 秋学期の活動内容
4. 今後の活動について

1. フジバカマプロジェクトの活動について

フジバカマプロジェクトは、京都府の絶滅寸前種であるフジバカマを保全することを目的としている。また、京都府の自生種のフジバカマを守るため、「指し芽」で増やし、学内および地域の各所でフジバカマを育て、花の咲くころに嵐電各駅に設置し、地域に保全活動を浸透させていくことを目標としている。本活動は一年を通して「指し芽」→「植える」→「観察」→「収穫」→「作る」→「芽がでる」というサイクルをしており、我々シチズンシップ・スタディーズ受講生は、10月初めの「観察」からサイクルに合流をした。

2. 現状を踏まえた目標設定およびその達成

秋セメスターから活動に合流した我々は、フジバカマを保全する活動そのものをしたわけではないが、この活動を知っている京都市民が少ないということに問題意識を向けた。そして、枯れた後のフジバカマを活用することによって、形を変えて生き続けるフジバカマのグッズを作り、また、その過程すらも思い出になるような企画をすることを目標とし、チーム全員が共通して活動を広げるということを軸に目標設定をし、活動に取り組んだ。結論としては、京都市民全体に向けた活動を知ってもらう機会を享受することはできなかったが、衣笠近隣の地域、特に御室地域に対しては、過程を重視した充実した活動ができたといえる。また、昨年度はできなかったこととして、学内のサークルと協働し活動したことによって、一部学生に対してもフジバカマについて知ってもらう機会をつくることのできた。

3. 秋学期の活動について

- ・嵐電沿線各駅へのフジバカマの設置（10月2日～18日）

沿線の各駅に本学で生育していたフジバカマのプランターを設置した。

→設置による反応や影響を詳しく調査しなかった。今後の改善点となった。

・摘み取った後の活用方法を模索する(10月下旬)

前年度の活用方法を振り返り、またフジバカマの持つ成分などを考慮しながら受講生が意見を出しあい、新たな活用方法を模索した。

・学生サークルを巻き込んでプロジェクトの発展(11月上旬)

縫製の作業に長けた人材がいない、そこで本学の手芸サークルに協力を依頼。ノウハウを共有してもらい成果物の量、質の向上へ

→自分たちの活動についてスライドを用いて紹介する必要があるあった。

ここで自分たちの活動について改めて中間の振り返りを行うことができるいい機会となった。

・近隣小学校へのイベント参加と体験空間の共有(11月19日)

話し合いの結果、最終的に「御室小学校 150 周年記念に合わせて」、「匂い袋を児童と一緒に作る」というものにまとまった。

御室小学校の創立 150 周年記念イベントに参加、匂袋の生地となる布を染色した。

・匂い袋の準備(11月下旬～12月上旬)

学内の手芸サークル「Rowan」と協働し、草木染めをした布を使用した匂い袋のデザイン、縫製を行った。また、チラシも作成し御室小学校の生徒へ配布した。(余談 掲載イラストは受講生のコンペ形式だった)

・匂い袋制作・作業(12月10日)

当日、児童・保護者に向けてフジバカマプロジェクトの活動について簡単に紹介した後、匂い袋の作成方法もレクチャーし共に匂い袋の制作を行った。(児童たちは、乾燥させた葉を砕いたあと、袋に入れて匂い袋を完成させた。)

4. 今後の活動について

京都府で絶滅寸前種に指定されているフジバカマを保全するという目標の中で、今後も収穫したフジバカマを効果的に活用し、より多くの人にこの問題を知ってもらうことを課題に据える。そのために、来年以降にどのようなイベントを行うかを、開催する場、集客方法などを含めて再検討し、引き続き「フジバカマプロジェクトの活動を京都府の人たちに知ってもらう」ことを目指していく。

京北 WS プロジェクト(A チーム)

大竹莉瑚・中谷太陽

1. 事前学習のまとめ

京北に現地で体験する前の授業時間内で、私たちは先生の話の聞いていると、中山間地域における活性化に向けてのノウハウや成功例を知ることができた。そこで私たちが注目したのは空き家を利用した住まいのサブスク「ADDress」と古民家を拠点に日本の原風景を味わう「NIPPONIA HOTEL」である。

1-1. 住まいのサブスク ADDress

ADDress は、日本各地の空き家を活用した、月額 4.4 万円から始められる住まいのサブスクサービスである。その場所は過疎地域や観光地、市街地などさまざまである。入会し宿泊する家の予約を済ませれば、その家に泊まることができる。また使い方に関しても、観光した後の宿泊施設やコロナ禍のリモートワーク先として活用したり、全国各地の ADDress 巡りを楽しんだりと多様である。また、家の管理や暮らしのサポートをしてくれる家守や、共同スペースを利用する ADDress 会員の交流も魅力の一つである。

このように、空き家を活用しながら自分なりのスタイルで楽しめるのがメリットであるが、中山間地域の活性化に ADDress は不向きであるとかんがえる。中山間地域の経済を発展させるには、その地域で雇用や地産地消を生み出すことが重要だからだ。宿泊費用は ADDress に落ちるし、一時滞在の宿泊者からは継続的な経済活動は見込めないため、地域への還元率が低いと指摘する。

1-2. NIPPONIA HOTEL

NIPPONIA HOTEL とは、従来のホテルや旅館のおもてなしとは違い、その土地の原風景や建築、食事をありのままに届けることがコンセプトの宿泊施設である。現在は北海道から沖縄まで NIPPONIA が展開されており、中でも NIPPONIA 成功のきっかけとなった集落丸山(兵庫県篠山市)では、2009 年に何の変哲もない田舎の集落の空き家を村人たちが宿泊施設に利用することから始まっている。また、篠山市の中心地の城下町につくられた篠山城下町ホテル NIPPONIA は、風情ある町並みを形作る歴史的建造物の趣をそのままにリノベーションし、城下町全体をホテルにして城下町を歩かせる仕組みを作った。成功の背景には、フロントと宿泊施設を分けて建てられるように、法律自体を変えてしまうという努力があった。地域一帯に宿泊施設があり、城下町を楽しんでもらうというコンセプトは、観光客が地域の商業施設をめぐることで大きな経済効果をもたらした。この 2 つのホテルの

例はまさに地産地消の考えに即しており、大きなお金が継続的に動くことで、地域の雇用を生み出すことに成功した例と言える。

2. 研修での学び

京北は66%が森林であり、そのほとんどが人工林の北山杉である。しかしながらこれらの森林は、林業の担い手や管理者不足により放置されている。手入れがされておらず細くやせ細った木か、戦後に植えた巨大な木が大量に存在している。これらは木材として利用するのが難しく放置され続けている。これを改善するために、北山杉の地産地消に取り組んでいる人々もいる。具体的には、京北に植えられている木を加工し、木材として京都府内の建築に使用するという試みである。

また京北には、放置された畑が無数に存在している。京北の畑は地理的な理由により、多くが多角形であり狭いために、ほかの地域の畑に比べ農業が難しいという特性がある。また畑がある土地は、別の使い道（例えば家を建てるなど）で使用するのに様々な手続きが必要であり、その手間からも放置される傾向がある。

京北では、山や畑だけでなく家屋も数多く放置されている。一見住めそうな空き家でもなかなか利用につながっていないという現状がある。この原因として、一見さんのお断りなどの閉鎖的な文化や、仏壇が残っている（中には家に組み込まれている）まま放置されて撤去することができないなどがある。また、交通整備が不十分であったり、都市へのアクセスが悪かったり、水道、浄水、電気などのインフラ整備が整っていないといった改善に時間を必要とする原因もある。

京北に限らず、里山では自然の脅威は恐ろしく、住人にとって深刻な問題になりうる。大雪の影響で道路が立ち行かなくなったり、害獣の影響で満足な農業ができなかったりといった被害が出ている。

3. まとめ

京北での体験や研修を通して、里山の暮らしや活性化の厳しさを改めて感じた。私たちは、地方の活性化に関して観光業に注目し事前学習にとりくんだが、観光業がどの地域でも沿うように効果をもたらすとは考えにくいと感じた。京北ではインフラや交通が整っておらずアクセスも悪い。さらに放置されている森林や畑、空き家などが多く、観光資源が非常にすくない。観光都市にするためにはかなりの時間とお金を費やし開発しなくてはならないが、過疎地域には資金や体力が残っていないと感じた。そのため、地域の特性を生かし地域ごとのアプローチが必要になると感じた。京北の場合は、第一次産業が主な産業であるため、それを町や府で支援をしてより強固な産業基盤を構築するという方法が考えられる。新しいことを始めるのではなく、ある程度基盤のある産業を強化する方法が効果的であると結論付ける。

はじめに

我々は過疎地域における地域コミュニティについて興味を持った。ここでは、おーらい黒田屋で行ったインタビュー調査や南丹市の事例をもとに現状を分析し、過疎地域の将来性について考える。

黒田地区

ここでは右京区京北黒田地区にある（有）おーらい黒田屋の取締役の方にヒアリングを行い、現地の生の声を聞き、考えた問題について論じる。

黒田地区は、人口 251 人で平均年齢 62.5 歳、65 歳以上の割合が 55.4%の限界集落である。（2022.10 京都市住民基本台帳より）

おーらい黒田屋の概要

ちょっとした買い物ができる商店が欲しいという住民の声にこたえて、黒田自治会と地域住民が資金を出し合って、2000 年（平成 12 年）に旧 JA 黒田支所跡にオープンした。

日用雑貨や菓子、パン、調味料などを販売するほか、地元の農家が作った農産物など地域の特産品を販売している。また、店内には喫茶コーナーもあり、地元の名所や片波川源流域を紹介する観光案内所の役割を果たしている。（ホームページより）

現状

おーらい黒田屋は定年退職した 70 代の役員が中心の組織である。

役員は、利益追求ではなくほぼボランティア状態で働いている。

自治会としての機能を持っている。地域として動きやすくまとまりができる。

主な業務は、日用雑貨品の販売業・空き家活用における仲介・地域の便利屋業（生活サポート窓口としての役割）がある。また、月に一度サロンを開催し住民の交流の場を作っている。

将来について

現状でも店の存続が厳しく、役員の方々が高齢であるため未来が見えない
行動を起こす気力や体力がないため、問題解決や地域発展につながらない
→住民では解決できない

「なにもかも明るい見通しが無い」と悲観的に

2. 京北町における地域コミュニティづくりについて

京北町について

令和4年10月の住民基本台帳によると、京北地域全体の人口総数は4580人。うち0～14歳の総数は309人であるのに対し、65歳以上の総数は2104人であり、少子高齢化が進んでいる。

現在京北町が行なっている移住者への施策

京北暮らし体験住宅とは、豊かな自然や伝統文化、ぬくもりを感じさせるコミュニティなど、田舎暮らしの魅力を体験できる取り組みである。体験住宅は周山・宇津・山国の3地区に整備されており、1ヶ月から最長12ヶ月の間で利用が可能。これは京北地域への移住促進の取り組みとして開設されているが、条件として対象者を「原則、単身者を除く」としている。

移住者を増やすために

まずは京北町について知ってもらうことが第一であると考え。そこで、日本だけに限らず、全ての小学生、中学生、高校生、大学生を対象に行う「山村留学」を提案する。

山村留学とは、NPO法人全国山村留学協会によると『「自然豊かな農山漁村に、小中学生が一年間単位で移り住み、地元小中学校に通いながら、さまざまな体験を積む」活動』である。

京北町において実現する際には、範囲を日本の小中学生だけに絞らず、日本・海外からの小学生、中学生、高校生、大学生を対象とした独自の山村留学の形態を提案する。若い年齢層へのアプローチにより、移住者の増加が見込めるのではないかと考える。また、これは特別支援学級と普通学級とに分けずに勉強することのできる環境であるため、インクルーシブ教育の充実に繋がると考えられる。

京都府南丹市美山山村留学の事例

南丹市美山山村留学事業は、25周年を迎える令和4年度に事業を終了する。これは都市児童を対象に自然環境への知識を深めること・山村児童や地元住民との交流を図ることを趣旨として実施されていた。しかし南丹市の財政状況、山村留学を支える地域住民の高齢化により後継者が見つからないということから事業終了に至った。京北町において山村留学事業を行う際には、京都市の財政状況、地域住民の確保が課題となってくると考えられる。

3. まとめ

過疎地域のコミュニティに関する事業においては、財政状況と地域住民の高齢化が課題となっている。若い世代を呼び込もうと活動する世代がそもそも高齢化していてアイデアが出にくい、行動する活力を持っていないといった問題が存在するため活動の持続性が見込めない。京北町においても、広大な土地の活用や新たな活動に取り組もうとする際の懸念点として、京都市の財政状況、運営側の高齢化に関しては避けられない問題であると考えられる。

2022 年度 京北 WS プロジェクト

C チーム：唐木田、田中、佐野

1, 京北地域と今回のプロジェクトについて

京北地域はその 93%が森林に占められており、古くから林業が盛んな地域となっている。古くは長岡京、平安京の造営のために京北の木材が用いられ、現在でも三条大橋の欄干修理に用いられるなど、京北の林業は長い歴史を持っている。京北の特産として、北山杉を用いた磨き丸太があり、数寄屋という茶室の建材として今も重宝されている。また、農業も盛んである他、納豆発祥の地の一つとされており、名物として納豆餅がある。

今回の主なボランティア活動は茅刈りであり、この活動や京北に関わる方のお話を通して、京北や中山間地域の文化や暮らし、現状を知ることが目的とする。

2, 現地での体験

2-1, 京北の林業について

京北林業の特筆すべき点として、「筏流し」と呼ばれる京北特有の木材輸送方法がある。京北地域は木材の消費地である京都と山で隔てられ、陸路での木材輸送が困難であった。京北周辺で切り出された木材は、筏に組まれ、筏士と呼ばれる職人によって桂川を流され、京都へと運ばれた。「筏流し」と呼ばれるこの手法は、近代に鉄道や自動車道が整備され、ダムで川が遮られるまでの間、京北の木材輸送の手段として用いられてきた。

また、京北の林業は北山杉を中心として行われてきた。しかし、バブル期以降の磨き丸太の価格低下、外国産材の流入、林業の担い手の減少などが重なっている。国の政策等で国産材の利用増加に向けた取り組みが為されるようになり、国内の林業は回復傾向にあるとされるも、数十年単位で営む林業は見通しが立てづらく、鹿などによる若木への獣害等による山林管理におけるサイクルの乱れも問題となっている。

林業は産業的な側面の他に、環境保護の役割も担っている。植樹と木の適切な管理は、二酸化炭素の削減につながり、山の管理は山間地帯が大半を占める日本において、災害防止や天然資源の保護といった観点からも重要である。地球温暖化や持続可能な社会が希求される現代において、林業と環境、社会との関係について考える必要があると感じた。

2-2, 茅刈り体験と茅葺住宅について

今回のプロジェクトでは、茅刈り体験を主として行った。茅とは、茅という植物があるわけではなく、イネ科及びカヤツリグサ科の草本の総称である。今回訪れた茅場は約 100 メートル四方のススキが生い茂る茅場であった。茅の茎は油分があることから、耐水性に優れており屋根を葺くのに好適な材料である。

○体験した茅刈りの工程

①茅を刈る

薄原に分け入り、何本かの薄を束にして刈る。刈った薄の全てが使えるわけではなく、茅葺屋根として使える一定以上の太さや長さを満たすものを選別する必要がある。

②茅を把に括る

刈った茅を「把」と呼ばれる把に括る工程。一抱えほどの茅を、藁を使って束ねる。

③把を干す

束ねて把にした茅を乾燥させる工程。把を組んでタワーのような形に縛る。

○気付き

- ・茅葺屋根を葺き替えるには多くの茅が必要であり、その工程には多くの人手が必要
- ・その年の茅を刈るのを怠ると古い茅が残り、翌年の茅刈りで選定に時間が掛かる
- ・茅葺の家の茅は、約 20 年周期で葺き替えを行うが、古くなった茅は、農業における肥料になるということで、資源の循環に繋がる

○河原林さんの家

京北地域に住んでいる河原林さんを訪問させて頂き、茅葺の家に関してお話を伺った。

①夏は涼しいが冬はとても寒い

→囲炉裏を利用した床暖房を利用する

②免疫力が上がる

微生物が沢山家にあふれており風邪や病気にかかりにくい

③葺き替えに費用がかかる

一度葺き替えをするのに約 600 万円→維持が難しく普通の屋根にする人が増えている

3, まとめ

京北でのプロジェクトとそこでの体験は、生産や伝統的な暮らしから離れた都市型の生活を外部から見直す良い機会となった。都市生活を成り立たせている生活資源は、それらを生産する都市外部から供給されている。自分達を取り巻く生活環境が何によって成立しているのか、自身の周囲や外部に目を向ける機会を持つことが必要であると感じた。

また、持続可能な社会が求められる現代社会において、京北の林業と森林管理の課題、筏流しや茅刈りに見られる無駄のない循環型、伝統的な生活には、現状を問い直すための視点があると考えます。他方で、中山間地域における生活形態やインフラ環境が現代人にとって厳しいものと受け止められること、そのために、過疎化、高齢化と文化の継承者不足が起きていることもまた確かである。そのため、地方が引き受けている課題を人ごととせず、自身に引きつけて考えていく必要があると考えます。

草津宿本陣「年越し大作戦」実行プロジェクト

<メンバー>

安代 千夏 (食マネジメント学部)
井本 麻友 (経済学部)
岡田 稜子 (食マネジメント学部)
兼子 莉歩 (食マネジメント学部)
廣實 香恋 (経済学部)
吉澤 こまち (経済学部)

<受入団体>

草津宿街道交流館

1：プロジェクトの目的・趣旨

貴重な文化財として知られる草津宿本陣を守っていくための啓発活動。

- ・草津宿本陣における基礎的な情報についてプロジェクトを通じて知ってもらい、歴史や建物に興味を持ってもらう。
- ・昔の暮らし体験や世代間交流の場とする。

事前学習：草津宿本陣についての下調べ

- ・江戸時代に参勤交代の大名らが休泊に利用していた建物
- ・新選組や徳川慶喜などの有名な人物が宿泊していた
- ・宿場町・草津の中心的存在
- ・当時の姿をそのまま留めている貴重な建物

活動内容

(10月)

- ・街道交流館の館長・学芸員の方々・本陣の職員さんたちと学生を交えた zoom 上での会議を行った。具体的にイベントの企画内容の提案をし、実行できるようにすり合わせを行った。
- ・草津宿本陣の知識を深め、イベント内容をより具体的にするために草津宿本陣を訪れた。学芸員の富田さんから草津宿の歴史を学び、展示物を見て文化財を守る意識を高めた。
- ・イベント内の焼き印体験企画への協力依頼をしに松利老舗さんへ伺った。

(11月)

- ・広報活動として、チラシの作成・Instagramアカウントの開設・ラジオ出演をした。チラシは小学校などへ配布した。

- ・イベント内のクイズの内容を考えた。
- ・イベントの参加賞で配布した缶バッジのデザイン作成を行った。
- ・参加者アンケートの用紙を作成した。
- ・田中議員(草津市市議会議員)の元へ、集客活動への協力依頼のため訪問した。
- ・最終打ち合わせを富田さんと zoom 上で行った。イベントの企画内容の確認・当日の役割分担をした。

(12 月)

- ・イベント開催当日、それぞれの役割を果たした。
- ・イベント後、アンケート集計や振り返り、報告会のための資料作りを行った。

活動の振り返り

1. 良かった点

- ・職員の方と何度も話し合い、柔軟に変更しながら企画を実現できたこと。
- ・親子・大学生・議員の方など幅広い年代の方に楽しんでもらえたこと。
- ・イベントの趣旨が伝わっていたこと。(歴史に触れ、色々な世代と交流できた)

2. 悪かった点

- ・現地見学の時期が遅く、準備期間が短くなった。
- ・寒さ対策が手薄だった。→チラシなどで、事前に持ち物の注意喚起ができていなかった。

今後の展望

- ・今回のような小学生を対象としたイベントを例に様々なイベントを展開し、草津宿本陣の存在をもっと知ってほしい。
- ・若い世代(特に中学生・高校生)を中心とした幅広い年齢層の方々に草津宿本陣という歴史的な建物を守る意識を高めてほしい。

最後に

イベント企画をゼロから立ち上げるという活動は学生の私たちにとって非常に良い経験となった。様々な人たちと協力して作り上げていく、ということの楽しさを学べた。

参加して下さった様々な年齢層の方や職員さんと学生たちとの交流を通じて、お互いに良い影響を与え合えたと感じた。

関わって下さった方皆様へ感謝を申し上げたい。

草津ブランド新商品開発プロジェクト 活動報告書

<メンバー紹介>

小野・河井・金城・西仲・谷川・眞弓・南城・神崎・吉井・ZHANG XINMIAO

<活動の概要・目的>

私達は、草津市内にあるエストピアホテルとの草津ブランドを使用した新商品開発を通して、草津ブランドの認知度を高める起点に私達になれるようこの秋学期の間、活動してきました。草津ブランドとは、滋賀県草津市における地域産業の活性化と市のイメージアップを目的として、様々な農水産物や名産品・工芸品が認証されてきたブランドです。しかし、後継者不足や草津市内での野菜の消費量が少ないことなどもあり、あまり認知されていないことが現状です。だからこそ、私達が草津ブランドを広める起点となるために、生産者さんへの取材や地域イベントの参加・SNSでの啓発活動などを通して、その魅力を伝えるための新商品開発に取り組んできました。

<草津ブランド認証商品の紹介>

農水産物	名産品・工芸品
草津あおばな 近江草津米 匠の夢 愛彩菜・草津メロン 琵琶湖からすま蓮根 琵琶湖元気アスパラ	和菓子：うばがもち・松里みかさ/松里もなか お酒：草津政所・天井川 瓢箪(ひょうたん)・金属工芸品・草津焼 ロートアイアンによる鉄製品 鍛造による鉄製品(日本刀)

<主な活動内容とそこから学んだこと>

草津ブランドの生産者への取材

メンバー1人1人が気になる草津ブランドをいくつか選択し、自らアポを取って取材に行きました。直接お話を聞くことや実際に現場を見て感じることで、生産者の熱い思いが伝わってきて、このプロジェクトに対するやる気を上げる大きな要因にもなりました。また直接お話を聞くことで、どんどん質問できることやその場で生まれた新たな疑問が解消されることなど、ネットで調べるよりも豊富に情報を集めることができました。このように取材の大切さについて深く学ぶことができ、とても貴重な経験となりました。

エストピアホテルとの商品開発に向けての打ち合わせ・提案プレゼン

まず初めに客室やレストラン・結婚式場などホテル全体をすみずみまで見学させていただき、新商品開発に向けての想像を膨らませました。ホテルの見学で感じたことや取材で得た知識を活かし、メンバーそれぞれが実現したい新商品案をブレインストーミングで出し合いました。そしてホテルとの打ち合わせを何回か行った後、提案プレゼンを実施しま

した。その中で、相手側が求めていることと自分達が考えていることを実現に向けて組み合わせしていく難しさをすごく感じました。予算やその商品の実現可能性などの様々な現実的な課題やコース料理には同じ食材は使用できないなどといったホテルならではの課題があり、このような大きなプロジェクトに終始携わっているからこそ感じられると思いました。相手のニーズに応える難しさについて知れ、全てが上手く進む訳ではないと学ぶことができました。

Instagramを使った啓発活動

Instagramを使って取材や体験・ボランティアの活動記録を公開してきました。今の時代 SNS を使った啓発活動はより多くの人に草津ブランドを知ってもらうため、とても効果的なものであり、実際、活動当初よりもフォロワーが増えたことやたくさんのいいねを頂くことができました。 [@932brand_ritsumeikan](#) ←ぜひご覧ください！

地域イベントへの積極的な参加

大規模なイベントでもあった 11 月 5 日(土)に BKC で行われた健康フェスタでは、松利老舗さんの実演販売のお手伝いや草津ブランドの認知度調査などを行いました。このような地域イベントに参加することで、様々な人とコミュニケーションがとれたことや相手の反応を直接感じることができました。「美味しい！」や「頑張ってるね！」と直接声をかけてもらえただけでもとても嬉しく、お客さんを笑顔にさせるような立場に自分自身になって、直接その反応を見ることができたこともとても実感が湧きました。そして、これからのやる気を上げる 1 つの大きな要因にもなりました。

授業時間内でのチームでの活動

普段の授業時間では今後の活動内容について話し合い、取材で得た情報の共有などチーム内での意見交流の時間を大切にしてきました。そうすることで、自分一人では思いつかないような考えと出会うことができ、自分自身の視野を広げることにも繋がり、そしてチームとして活動することの面白さや大切さについて気づくことができました。それぞれが大学で学んでいる分野を活かし自分の興味・関心を持ったことに対して広く深く学んでいることを他学部の子と交流することで知ることができました。また、このような活動を通して一生懸命頑張っている友人を見て自分も頑張ろうと切磋琢磨することができ、それが自分自身の成長に繋がっていることをとても感じることができました。

<まとめ>

- ・取材に行き直接生産者の熱い思いを聞いたことで、どんどん草津ブランドを身近に感じることができたことや文化が後継されることは当たり前ではないということを学べた。
- ・商品を開発する上での楽しさや難しさを知ることができ、草津の伝統を守りながら新たなものを生み出す重要さを学ぶことができた。
- ・草津の誇りあるブランドを通して地域の人々と関わり、商品開発を通して地域に貢献できる活動に参加でき、とてもやりがいを感じる事ができた。

若者の投票率向上に向けた模擬投票イベント

実施者：河内隆希、井上湧大、中嶋明星

事業計画書の作成

テーマ：あなたが選ぶのはどっち？過去か未来か

内容：タイムマシンがついに完成しました。しかし、タイムマシンには1度しか乗れません。
過去か未来、あなたはどちらに行きますか？

チラシの作成

- ・投票のテーマ、開催日時、開催場所、投票の簡単な説明を記載
→選挙管理委員会の方と何度もやり取りを行った
- ・貼り出し用、配布用、掲載用の3種類を制作
掲載用：イオンモール草津 HP に掲載
配布用：イオンモール内、各小中学校にて配布

イベントの周知

→広報くさつ、草津市 HP、草津市 Twitter、イオンモール草津 HP、チラシ等を活用

選挙公報の作成

- ・イベントなので明るい色を使用し、ポップなデザインにした
- ・過去と未来の雰囲気が出るような画像を使用
- ・明るいデザインにしながらも、実際の選挙公報から離れすぎないようにした

動画の作成

→投票の仕方を説明する動画の撮影を11月18日に草津市役所で行い、動画を作成

本番の内容

- ・受付の前で風船を配布
- ・イベント当日には、ゆるキャラのたび丸も登場
- ・作成した動画を受付の前で放映
- ・実際の投票に用いられているものを使用
- ・背の低い記載台をたくさん設置

グッズ配布

- ・ノートまたはクリアファイル(2種類)から1つ+ウェットティッシュとシールを配布
- ・イベントの途中でノート、クリアファイル1種類、シールの準備していた分が終了
→クリアファイル内に塗り絵を挟む、シールの代わりにウェットティッシュを2つ配布するなどの工夫
- ・受付周辺で小さい子に向けて風船を配布
→200個準備しており、イベントの途中で追加

開票結果

→開票結果は草津市HPにて発表

- ・投票総数：162票
- ・未来：89票
- ・過去：63票
- ・白票：1票
- ・無効票：9票

気づき

- ・すぐに結果が出ることではないが、将来の選挙の投票率が上がることや選挙に対する意識が高まることを目的に模擬投票を行うこと
- ・選挙や投票になじみを持ってもらうことが大事
- ・ゆるキャラは集客力が強い

学んだこと

- ・選挙には多くの人に関わっていること
- ・みんなに来てもらうためには、それぞれの立場を考えなければならないこと

今後の展望

- ・テーマが本当の選挙よりも離れたものだった
- ・よりリアルなテーマや論点を用意して、よりリアルになれば良いと思う

草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト

担当：大庭三奈、田中恒輝、野村悠、丸山幸之助

1. はじめに ～草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクトについて～

草津市のまちづくり協議会は、これまで様々な活動を大学生と協力して行ってきました。昨年度は、廃棄予定のメロンを用いた新たなレシピ開発プロジェクト、LINE 公式アカウントのキャラクター考案等が行われています。しかし、依然として大学生との交流がなく、新たな企画に取り組むことが出来なかったまちづくり協議会や、地域との繋がりを欲しているものの、コロナ禍で活動機会の減少・活動場所の制限に見舞われた学生団体がありました。

そこで、今回私たちは中間支援組織である草津市コミュニティ事業団と共に、「草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト」として互いが知り合うためのマッチング会を企画・運営し、大学生と草津市内の学区まちづくり協議会の更なる繋がりを作り出すことで、新たな企画・価値創造を目指しました。

2. 目標

- i. 大学生と草津のまちづくり関係団体をつなぐ交流企画を開催すること
- ii. 大学生とまちの素敵な連携例をもっと草津市の人々に知ってもらうこと
- iii. 地域社会とのかかわりの中で、学びを得ること

3. 主な活動内容

○学生団体へのコンタクト

今回のマッチング会に参加する学生団体を集めるために、SNS 上での声かけを中心に、みなくさま祭り等のイベントで声かけを行いました。その後、集めた参加希望の学生団体リストの中から、協議会の方達が希望する学生団体を更にリストアップして、LINE 公式アカウントを追加してもらい、当日の案内をしました。

○まちづくり協議会・学生団体へのヒアリング

今回のマッチング会に参加希望の6つの協議会と、昨年のマッチング会を機に地域とつながった3つの学生団体に対し、ヒアリングを行いました。協議会には、解決に向け学生と一緒に取り組みたい課題・現状を中心にお話していただきました。一方で、学生団体には地域と連携して良かった点や今後の課題を中心にヒアリングを行いました。ヒアリングによって、協議会からは企画のマンネリ化といった課題を解決するために、学生との繋が

りを強く求める声が聞かれ、学生側からは活躍の場を広めるマッチング会に今年度も参加したいという意見を聞きました。

○FM ラジオ出演

今回のマッチング会について多くの方に知ってもらう広報活動の一環として、えふえむ草津の「コミュニ tea time」という FM ラジオ番組に出演しました。広報の内容は、今回のマッチング会を行う意義やどのような学生サークルを募集しているか、また、私たちが今回のマッチング会を開催するにあたっての思いについて話しました。

○当日運営

当日の進行は、学生団体の活動紹介を各団体 3 分ずつ行った後、協議会と学生団体との 15 分のマッチングを 3 回行いました。1 回目は事前にヒアリングした内容を踏まえ、各協議会の希望に近い学生団体を主催側でセッティングしました。残りの 2 回は初めに聞いた活動紹介の中で興味を抱いた学生団体と自由にマッチングをしてもらいました。各テーブルでは協議会が現在抱えている課題や学生に期待することを話し、学生団体は自分たちにできることや一緒に取り組みたい活動について話しました。その後話した内容から生まれた案についての実現可能性を考えました。実際に挙げた実現可能性の高い案として、小学生を対象とした体験教室の開催や地域イベントへのステージ出演等がありました。マッチング終了後には各テーブルでどのような話し合いが行われたかを発表し、会場の参加者全員で共有しました。

4. おわりに～目標達成度・マッチング会の感想～

最後に、プロジェクトの目標を達成できたか振り返っていきたいと思います。目標 i については、マッチング会を大きな問題なく開催することができ、新しい繋がり種が生まれました。目標 ii については、ラジオ出演をはじめ LINE などの媒体で自分たちが行なった活動について紹介することができました。目標 iii については、協議会へのヒアリングを通じ、協議会の行なっている事業内容や課題、草津市のまちづくりについて理解を深められました。以上のことからプロジェクトの目標は全て達成することができたと言えます。

また、今回の企画後、参加者から様々な声が寄せられました。今後につながる対話が出来たという声や、連絡先を求める声も多く寄せられました。前回の反省点を基に強化された今回のマッチング会では、多くの出会いが生み出され、各テーブルで実現可能性の高い企画案が生まれました。Instagram での広報の実施等、改善点はありますが、学生の地域連携の後押しに加え、私たちも草津のまちづくりに貢献することができました。

みずとわプロジェクト

- 報告レジュメ -

「メンバー紹介」

堀陽斗、木戸江里夏、木村智尋、道端明日美、大野堅慎、衣川誠広

「茨木市の北部地域について」

都市へのアクセスがしやすく、かつ美しい里山の景観があり、新鮮な農作物が育つ自然豊かな地域である。都市の賑やかさと自然の静かさの両方を持つ地域である。一方で、少子高齢化や人口減少、若者の流出の課題がある。

「一般社団法人みずとわについて」

一般社団法人みずとわとは、「水と〇（わ）で心を動かす」をミッションに、「人の心を動かすこと」を事業にしている。循環の環、人の輪を広げてすべての命の源である水をはぐくむ自然と調和する生き方や社会のあり方を目指している。「どんな環境下でも、面白くサバイバルしていく」ため、自治コミュニティを作り、生きるために必要なものをできるだけ自（知）給自（知）足していくことを大切にしている。人間がいることで、地球が良くなるようなありかたを見つけていくため、にんげん小屋を開いている。

「課題解決に向けた受け入れ先の挑戦」

持続可能な「食」を考え、できることを実践する。

「地域活動を行う上でのチームの目標」

持続可能な食に対して自分事として深く考える習慣を身に着け個々のビジョンを持てるようにする

「チーム目標にどれだけ近づけたか」

衣川誠広：授業開始当初の目標は「自然と共生し、自然を通して心も体も健康に暮らせるように模索する。」であった。しかし、日常において自然とふれあう機会を設けるのは難しかった。みずとわさんの活動を通じて農作業や山の整備を体験し、自然とふれあい体を動かすことは自分に合っていると確信できた。また、自然を介しての人とのコミュニケーションの素晴らしさも知ることができた。大学卒業後は専門学校に進学し森林や林業について学ぶが、今後も自然のすばらしさや人とのつながりの大切さ、体を動かすことの楽しさを忘れずに歩んでゆきたい。

木村智尋：自分の食べるものへの関心・立ち位置を理解すること。

①家の畑作業を手伝い、自分の食べている食材について感心を持つ。

⇒収穫の手伝いをし、肥料の種類など育て方を知った。

②食べられるようになるまでの、課程を理解する。

⇒作物が育つまでにかかる期間を聞き、大変さを知った。

大野堅慎：積極的に自主的に活動に取り組む。自分の視野を広げる

自分が食べるものがどのように作られたのかを理解してご飯を食べる。

⇒活動を通して有機農法でも餌の

家庭菜園をしながらミニ農業をする。

⇒自宅でレモン、バジルの家庭菜園の手伝いをした。将来自立した後も自分で何かを育てようと決意した。

堀陽斗：(ビジョン) 働きながら週1、もしくは2週に1回程度のペースで畑で食物を作る。それが厳しそうであれば家庭菜園をする。

これまでは気にならなかった、街角で野菜や果物を販売していることに気づき、意識するようになった。食に関することだけでなく、様々な社会問題に興味を持つようになった。

道端明日美：購買者の立場として、持続可能な食を考える。

①地産地消に関わる知識を持つ

⇒茨木市にある地産地消を行っている飲食店を調べた。

②自分で選んだ食材で調理する

⇒みずとわで頂いた食材を含め、普段から自炊をする習慣が出来た。

③自分でも食材を育ててみる

⇒カイワレ大根を育てた。今後は他の植物も育ててみたい。

木戸江里夏：活動を通じて新たな価値観との出会いを大切にし、人としての幅を広げる。

以前

→食の安全性などには全くと言っていいほど関心がなく、早く・安く・おいしいものを如何にして摂取するかを考えていた。(コンビニや外食)

→農業生活の楽しさや価値を全く考えられなかった。

現在

→その食べものや食材がいかにして作られたかを手に取ってみるようになった。

また、食に対しての選択の幅も広がり、自分で作る・家の野菜を使ってみる・家族に何かを作るということも少しはするようになった。

→みずとわの方の価値観や考えをお伺いする中で、今までの自分の考え方に疑問を持つことや、違う可能性も考えられるようになった。

「まとめ」

みずとわさんの活動を通して、それぞれの生活スタイルに合った持続可能な食についての食についてのビジョンを持つことができた。また、そのビジョンの達成に向けて動き始めることができ、継続的な取り組みが必要であることが分かった。

フードパントリー茨木 Rits プロジェクト 発表レジュメ

1. 活動先情報と活動内容

◆ フードパントリー茨木

活動先の情報

フードパントリー茨木では、市民の方々から家に余っている未開封かつ消費期限が 1 ヶ月以上残っている食料や日用品を寄付いただき、困っているの方々へお渡しします。この食材や生活物資を必要としているの方々へ提供する活動は、食品ロスの削減と共に困窮世帯への援助という環境と福祉両方の側面から社会貢献を図っています。

活動内容

フードパントリー茨木では、お米やインスタント・レトルト食品、お菓子、缶詰、乾麺などの食料品だけではなく、ティッシュやマスクのような日用品なども含め、日常で誰でも使えるようなものを月に 2 回収しています。その後、集まった物資の消費期限を確認して仕分けし、お渡しの際には家庭の必要に応じて各自選んで頂けるような形をとっています。各家庭の事情に合わせてこちらからお届けに行く場合もあります。

◆ 水尾子ども食堂

活動先の情報

水尾子ども食堂は、茨木市水尾にあるコミュニティセンター内で開催しており、子どもだけでなく大人も利用することができます。コロナウイルスの影響でしばらく運営を休止していましたが、昨年 10 月から再開しました。水尾子ども食堂では、利用者への食事や食料の提供に加え、食後にくつろげる場所を提供することで地域内での繋がりや居場所づくりにも貢献しています。

活動内容

水尾子ども食堂では、月に一度夜に、地域の方々に向けて子ども 100 円、大人 300 円でカレーを調理し提供しています。活動日は、事前に予約のあった 30 名程度の利用者の受付、食事の調理や配食、片付けを行います。

2. チーム目標

「私たちが地域の人々（提供する人、支援を受ける人、運営する人）と積極的に関わり（作業でのコミュニケーション、子ども食堂での関わり）を持って話すことでさまざまな価値観や課題を知ることができるようになる。」

3. 活動を通して学んだこと

中村： 実際に活動や勉強会に参加することで、フードパントリー茨木や水尾子ども食堂は、食料を必要としている方々に届けるだけではなく、「活動の中でお話しして分かった利用者さんの抱える困りごとを支援できる機関に繋げる」「地域との繋がりを生み出す」という目的も持って活動をされていると知りました。様々な要因が絡んで発生する貧困や格差の問題に対して多面的な支援を必要とし、不安を抱える利用者さんに、寄り添い、安心できる地域の居場所を提供することの必要性について学ぶことができました。

安藤： フードパントリーとして食料支援の活動だけでなく人々が安心して集まれる場所づくりも支援を受ける方たちにとって重要な役割を担っていると感じた。食料を受け取るだけでなくその後のスタッフとの会話ができる場所づくりや子ども食堂などで安らぎを与える場所づくりを提供することで市民とのつながりを強く感じた。この活動を通して人との関わりや市民のつながり、コミュニティの大切さを感じた。スタッフだけでなく支援してくれる方の支えなどもあり、いろんな方たちの協力によって団体や人々が支えられていることも強く感じた。

み・らいず2 レジューメ

1. メンバー紹介

永福真奈、岡田浩亮、鍛冶百伽

2. み・らいず2 と事業の概要

み・らいず2 は2001年に設立されたNPO法人で、「だれもが、自分らしく地域で暮らせる社会」を目指して活動している。み・らいず2にはサポート事業部、スクール事業部、ワークス事業部、ヘルプ事業部がある。子どもに貧困問題に取り組む、不登校の子どもたちを対象に学習塾を開く、働きづらさを感じている若者の就職をサポートするなど、幅広い事業を展開している。

3. 主に関わった事業について

私たちが関わったのはヘルプ事業部である。ヘルプ事業部は、移動支援を行うガイドヘルパーを知的障がい者の利用者のもとに派遣する事業を展開している。移動支援とは、屋外での移動に制約がある障がい者が社会生活上必要不可欠な外出や余暇活動などの外出をサポートするものである。具体的には外食や買い物、動物園やカラオケなどの外出の付き添いがあげられる。

4. チーム目標

- ①マップを通じて、利用者さんの選択肢を広げ、新しい経験をしてもらい、笑顔になってもらう。
- ②利用者さんを通して、ご家族の視野を広げる。

5. 活動内容

○1日目：ガイドヘルパー講座1日目

1日目の講義は3コマあった。1コマ目の人権の講義では、人権について改めて学び、確認することができた。2コマ目は障がい者・障がい児福祉の制度と移動支援事業の講義だった。3コマ目は障害（知的障害）の理解の講義だった。知的障害の種類ごとに障害に関する動画を見た。

○2日目：ガイドヘルパー講座2日目

2日目は4コマの講義を受けた。1コマ目は移動支援従業者の職業倫理の講義だった。2コマ目は障害者・障がい児の心理の講義だった。利用者さんのやりたいことを支援することが、全体の講義のテーマとして挙げられていた。3コマ目は移動支援従業者の業務の講義だった。4コマ目は移動介助の基礎知識の講義だった。

○3日目：ガイドヘルパー実習

ガイドヘルパー実習は先輩ヘルパーの移動支援に付き添う形で実施した。

（永福）

午前中はジャニーズショップに行き、その後モスバーガー昼食をとって午後はカラオケに行った。私が活動の中で最も印象に残っていることは、3時間ほど滞在したカラオケ店から帰ろうとしている時に「楽しかった？」と声をかけられたことだ。障害のある方のしたいことに付き添うのがヘルパーの役目であるため、カラオケでもその方が歌いたい曲を好きなだけ歌っていただいた。私はなるべくその方の歌いたい曲を歌ってい

ただきたいと思い、自分が普段聴いている曲やマイナーな曲は入れないようにしていた。先輩ヘルパーを含め3人全員が知っているような認知度の高い曲を選択して全員で歌えるように配慮していたのだが、そのことが本人にはかえって「気を遣われている」と感じる原因になったのかなと今になって振り返ってみると思う。

障害があるからといっても自分でできること、自分の思い通りにしたいことはたくさんあるだろうし、必要以上に気を遣いすぎることはダメだとこの経験から学んだ。

(鍛冶)

実習は、利用者さんをお迎えに行くところから始まった。そして、目的地の京都アメリカンフードフェスの会場まで電車で移動した。一緒に昼食を公園でとり、平安神宮や蹴上インクラインを散歩した。最後に利用者さんの自宅まで送って実習は終了した。実習で一番感じたことは、知的障がい者の人は私が思っている以上にできることが多いということだ。実習の結果として私は自分の認識を改めることになった。障がい者が本当に困っている時だけ手を貸し、困っていない時は近くで見守ることが最善の支援だということを学んだ。したがって、障がい者にもできることがあり、自分でしたいことがあるということを周りの人は知っている必要があると感じた。

(岡田)

私は20代男性の利用者さんの移動支援に付き添った。京都府立大学学園祭、京都府立植物園、イオンモール北大路を訪れた。

最も印象に残っていることは、京都府立植物園での「コーヒー」に関わる出来事である。利用者さんは「職場（焼き肉店）でもコーヒーを出してるけど飲んだことはないんですよ。」と話しながら、コーヒーの木を5分くらい観察していた。その後、歩いている時に「コーヒーを飲んでみたい。」とおっしゃったため、休憩所の自販機でコーヒーを購入することにした。しかし、自販機には4種類のコーヒーがあり利用者さんは困惑してしまい、コーヒーを飲めなかった。私はこの経験から、どうしたらコーヒーが飲めたのか、飲めなかった原因はどこにあるのかについて考えさせられた。

○4日目以降：マップ作成

グループ内で実習を通じて感じたことや発見したことをまとめ、マップのイメージを共有した。また、み・らいず2の職員さんからのアドバイスをもとにマップを改善していった。さらに、実際に街を歩きながら情報を集めた。マップはPowerPointを用いて作成した。

6. プロジェクトの目標達成度とまとめ

達成度は50%前後であると考え。講義で得られた知識を用いて実習に参加し、マップ作成のヒントを得た。また、マップ作成のために街歩きを実施し、情報収集を行い、マップを完成させた。しかし、このマップが本当に利用者さんやご家族の役に立つかは分からない。訪れたことのない場所という点では新しい選択肢であるが、利用者さんは私達がおすすめしたところを気に入ってくださるかは不明である。したがって、チーム目標の達成に向けて私達はできるだけのができたと考える。

総持寺団地プロジェクト

「メンバー紹介」

上野玲 田伏一磨 介中玲奈 秋好美空 表伸一郎

「総持寺団地の概要と現状」

茨木市と高槻市の2つの市にまたがって構成されており、築50年を超える団地である。高齢化率は52.5%、世帯構成は1.4人であり、1人暮らしをする高齢者「独居高齢者」が多い特徴をもつ。また、自治会組織が数年前に解散されたことから、住民同士の交流の場が減少し、住民の孤独化が進んでいる。

「関係機関について」

総持寺団地の活性化には、社会福祉協議会、コミュニティ・ソーシャル・ワーカー、地域包括支援センターなどの密接に関わりながら住民の健康的な生活を支援する専門職の方々から、民生委員や福祉委員などの住民に近い方々まで携わっている。これらの方々が共同となり、団地活性化に向けてこれまでに様々な取り組みを行ってきた。

例) よりそい相談会、昔懐かしの写真展、よりそいカフェ

「課題解決に向けた受け入れ先の挑戦」

課題：・地域コミュニティの衰退

挑戦：・住民が団体関係なく、主体となってまちづくりを行うための基盤をつくる

・住民同士がより密にコミュニケーションが取れるコミュニティづくり

「地域活動を行ううえでのチーム目標」

学生や関連の専門機関がサポートし、団地の住民が自然に参加し、交流促進、継続していける企画を提案・実施している

「何に貢献できたか」

私たちは目に見える部分と見えない部分で貢献できたと感じるところがある。

まず、目に見えるものとして、イベントの提案と実行が挙げられる。私たちは定期ミーティングで、短期・長期でできるイベントを発表した。例として大学生の座談会、着物の着付け教室や、団地ガーデンなどがある。実際に短期でできることとして、カフェでミニゲームや飾りを増やすととても盛り上がり、集客につながった。これから実施する予定のイベントは、UR コミュニティーさんの協力のもと、団地内を周回する見守り隊の活動を開始する。また、室内外で体を動かせるミニゲームなどを行うイベントなども関係機関の多くの協力を得て決定している。

目に見えないものは、学生が加わることで関係機関の意欲が増進したことである。ミーティング回数が増加したり、新しい発想が浮かんだり実際に行動まで移せたという、各機関の方の声を聞くことができた。これらのことは、学生がたくさんの思いをぶつけ、運営の動力となり、それに応える関係機関の方が否定せず、短い間にできることから着実に行動することから相互作用し、学生と団地が交流する礎を築く充実した期間になった。

「無力に感じたこと」

まず1つ目は、学生が企画したイベントを実施するとなった際に、備品を買うお金はどの関係機関が出すか、いつどの時間に開催すればより多くの関係機関が協力できるか、関係機関が多いが故にその1つ1つを決定するのに多くの時間を要した時である。我々がお金を出せるわけでもなく、我々だけで企画を成し遂げられるだけの力もなく、最終決定をできる立場でもないため、その現場に直面した時は無力だと感じた。

2つ目は、各関係機関の総持寺団地活性化の意義や理想像は違うはずだと認識してはいたものの、その意義や理想像を確認するための時間を作れていなかったが故に、関係機関とのミーティングの際に議論が上手く進まなかった時である。意義や理想像の擦り合わせの必要性を感じた機会があった際に、無力だと感じた。

3つ目は、関係機関が賛同する良いアイデアを提案できたものの、企業の方針上、経費を捻出できないかもしれないという状況に直面した時である。どれだけいいアイデアがあったとしても、企業の方針という壁があると知った時、無力だと感じた。

4つ目は、総持寺団地の活性化に、関係機関をはじめとした多くの人がなぜ力入れているのか、その背景を学生が十分に理解出来ていなかった。関係機関との会議の際にそれを痛感させられる機会があってその時に無力だと感じた。

「今後に向けて」

今後に向けて私たちは二つのことが必要だと考えた。

一つは学生の継続的な参加である。団地の問題を短い期間で解決することは困難であるので、もっと時間をかけることが必要であると体感した。

もう一つは内部や直接的な関係者以外も集まって問題に取り組む方がよいのではないかとということである。私たち大学生など外部の人が関わっていくことで、違う視点からの考えを提供することができ、新たな発想をもたらすことができるからである。

「まとめ」

総持寺団地が住民主体で活性化を図ることを目標として、この半年間活動を続けてきた。実際に総持寺団地でのイベントに参加するなど住民の方々と話す機会や総持寺団地を知る機会が生まれた。また目標のために授業時間内に各個人のフィードバックや活性化のためのイベント考案を通して学びを深めた。

OFIX 国際理解教育(多文化共生を目指そう！)

立命館大学 OIC キャンパス

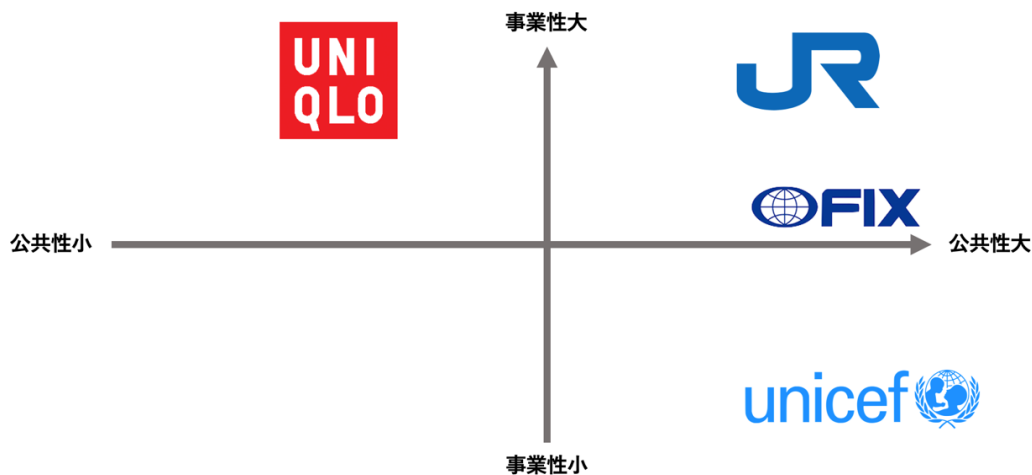
PARK GYEONGMIN

KIM DAHYUN

KAWABATA HANA

OFIX とは

- Osaka Foundation of International Exchange の略(大阪国際交流財団)。
- OFIX 下記の表の通り、事業性は少しあり、公共性は大きいという場所に位置している。



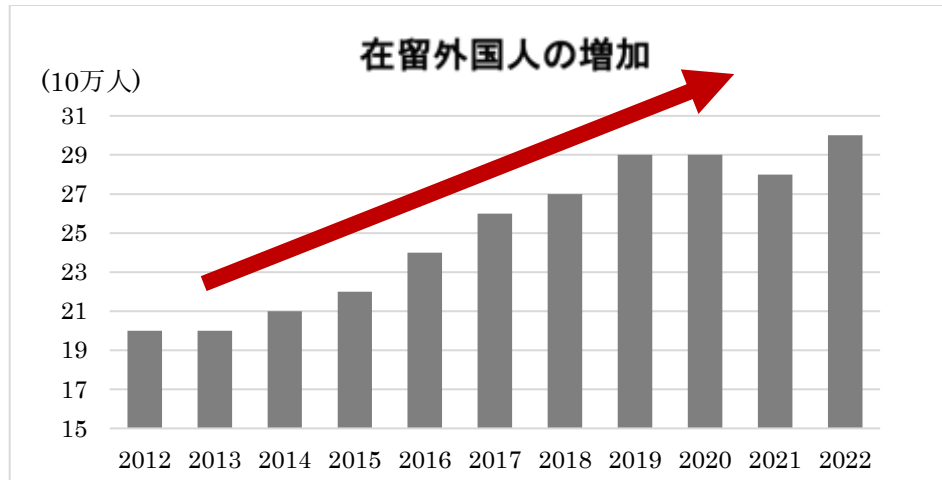
出所: 谷本寛治編(2006)『ソーシャル・エンタープライズ 社会的企業の台頭』中央経済社を元に筆者作成。

OFIX の存在意義と目標

- 大阪地域の国際化を推進する中核的組織として、多文化共生の強化や、日本に住む外国人のサポートなどを通して、大阪府民の国際交流の促進を図ることが目的であり、目標である。

目標に対しての現状

- 近年、下記のグラフの通り、グローバル化が進む中、日本においても「在留外国人」が増加している傾向が見られる。
- 在留外国人が増加することで、「異文化理解・異文化コミュニケーション」などの外国人との接する能力がより必要になってきたが、まだ十分な異文化理解ができていないと言われている。
↑ 本当にそうなのだろうか？



出所:「入国在留管理庁」報道発表資料(2022)を元に筆者作成。

活動趣旨

- ①外国人の受入促進と活動環境の整備
- ②グローバル人材の育成
- ③国際交流情報の発信

の3つがあり、今回私たちは主に②に取り組んだ。詳しい活動内容については、プレゼンテーションで述べたい。

チーム目標

異文化を理解してもらうためには、まず「1mm でも異文化に対してポジティブな印象を持ってもらう」が大切。

↑この目標設定に至った経緯は、半年間という短い期間で、異文化を理解してもらうためには、まず異文化というものに対して、少しでも良い印象を持ってもらうことが非常に重要だと思ったため。

活動を踏まえた個人のメッセージ

<パク・キョンミン>:異文化交流はちょっとした笑いが必要!

<キム・ダヒョン>:みんなで楽しく異文化を知っていこう!

<川端・花>:異文化と聞くと、身構えがちだけれど、大袈裟に騒ぐほどのものではない!!

私たち全体からのメッセージ:「異文化」とは?

- ・異文化は間違いではなく、違いである。
- ・異文化交流とは、様々なパーソナリティーの人と出会い・交流である。
- ・興味を持たないと分かり合えない。

プレゼンテーションでは、主に「活動趣旨」から「私たちのメッセージ」までの部分をそれぞれの経験を踏まえてより詳しく、具体例を交えながら共有したい。

自己完結せず、満足しつつ、地域に貢献を

山口 洋典（立命館大学共通教育推進機構教授）

＜担当プロジェクト＞

- ・時代祭応援プロジェクト
- ・堂本印象美術館プロジェクト
- ・衣笠地域連携課プロジェクト



今年もまた、活動報告会がやってきました。ただ、そうした感覚に浸っているのは、事務局スタッフを含めた運営側と、受入団体の方々でしょう。受講生にとっては初めての機会として迎える場です。それが一生のうちで1回限り、という認識はないかもしれませんが、運営側や受入団体の方々もまた、今年の報告会は今年ならではの内容を反映した場として、一期一会の場面として、皆さんの発表に関心を寄せつつ、この日を迎えています。

長引くコロナ禍ではありますが、万全の感染対策のもと、2022年度の「シチズンシップ・スタディーズ」では、この2年間には抑える・控える必要があった活動にも、一步踏み込んで取り組むことができました。ちなみに、この「シチズンシップ・スタディーズ」は、2020年度までは通年での「シチズンシップ・スタディーズⅠ」と1セメスターで完結する「シチズンシップ・スタディーズⅡ」の2つの科目が、相互に関連づけながら展開されてきました。両者の違いは「Ⅰ」が予め活動先から活動内容とスケジュールが提示されているもの、「Ⅱ」は受講生の自主企画による活動が前提とされるもの、という違いがありました。ただし、「Ⅰ」と「Ⅱ」の2つに分かれていた2020年度も、そして両者を統合しつつ「Ⅰ」を基軸として新たに1セメスターで完結することとした2021年度の新シチズンシップ・スタディーズでも、受入先の皆さんから示された現場で「すべき」ことも、一方で受講生が「やりたい」ことも、一定期間の現場との関わりを通じてきちんとやり遂げることができるよう、チームワークが重視されてきました。

ただし、現場から求められる「すべき」と、自分たちが「やりたい」ことの双方を実現

することは簡単なことではありません。「やりたい」ことを優先してしまうと「すべき」ことが軽視されてしまう可能性があることは容易に想像がつくことと思われそうですが、一方で「やりたい」ことが果たしてチームのメンバーでの総意か（簡単に言えば、やりたくない人もいないか）が問われるためです。このように、「すべき」ことができているか、あなたが言う「やりたい」ことはみんなが「やりたい」と思っているか、これらに加えてもう一つ受講生に問われることは、「やりたい」ことが実現すると何がどうなるのか、ということです。現場の方々には受講生の意思決定を尊重いただけるので、あまりそうした活動の意味や意義、転じて活動の目的や目標に対して寛容に受け止めていただけるのですが、大学と地域社会を行き来しながら学びと成長を重ねることを前提に開講されている授業設計と評価に携わる立場としては、活動が自己完結していないかを、特に慎重に受け止めています。

シチズンシップ・スタディーズにおいて、現場でのオリエンテーションを経た事前学習で目標設定を行い、中間ふりかえりで目標の再設定を行い、事後学習で目標に対する相互評価を行うのは、活動が自己完結しないようにするためです。少なくとも私は「皆さんはそれでいいとしても、それが何になるのか」を皆さんに問いかけました。「こんなにがんばっているのに」という思いもあったことでしょう。しかし、皆さんが語ること、文字にすること、何より時間を割いていること、それが自分たちの世界に留まるだけでは、現場のためにはなりません。現場のために、仲間と共に、丁寧な実践を重ねる経験が身につけていることを願っています。

古民家再生という課題から社会の協創に向けて

景井 充(産業社会学部教授)

<担当プロジェクト>

・京北 WS プロジェクト



京北エリアとの関りは、2007 年の冬に始まったからもう 10 年を超えるが、昨年度から本シチズンシップ・スタディーズで開講することとしたこの活動は、一昨年度に産業社会学部の「企画研究」という教員発意型の授業から開始した、まだ若い活動である。それまでは基本的には「農」分野での関わりにとどまっていたが、本活動によって、北山杉で名高い京北の主幹産業である林業分野との接点を持つことができるようになった。すっかり都市型大学と化した立命館大学にあって、中山間地域や農山村、農林分野に関わる学習機会を小さいながらも提供できることは実に喜ばしいことと思っている。世の中“サステナビリティ”流行だが、国土面積の 7 割を占める山間地や農林水産分野をスルーして“サステナビリティ”を語ることなど、端的にナンセンスだからである。

茅葺古民家の維持再生を試みる活動をボランティアとして少しお手伝いする機会を持ち、①里山の暮らしのありように触れ(温故知新!)、地域の維持存続に関わる問題意識を育て、持続可能性が大きなテーマとなっているポスト現代社会を構想するためのヒントを探すこと、②中山間地域の農山村で暮らしながら将来展望を切り開こうと努力されている団体や個人の諸活動に接する機会を持ち、自然環境や地域のさまざまな特性を踏まえて(同時にそれに拘束されながら)、暮らしの未来を創出するとはどういうことかを考えること、この 2 点を主たる活動目標とした。本科目のテーマに即していえば、これから自分たちが生きていく社会をどのような社会として作り出していくの

かを、社会的・公共的な観点から考える機会として欲しい、というのがこちらの願いであった。

縮小社会化や新自由主義的構造改革が急激に進む激動の中で、持続可能な包摂的社会を創造しそこに生きることこそ、21 世紀中葉に向けて、最も重要な「シチズン」の課題だと考えるからである。

今年度は、新型コロナウイルスに昨年度ほどの影響を受けなかったが、京北サイドでは中山間地域をめぐる環境変化の点で実は大きな象徴的变化があった。「新しい公共」という言葉を今はほとんど誰も語らないが、この言葉が指示した事態は現在も進行中で、社会的世界の構造改革は着々と進んでいる。10 月 1 日付で発効した「労働者協同組合法」も地域づくりの主体を行政から現地住民に移行させることを意図しているが、こうした状況の中で、改めて「シチズンシップ」とは何か、その根本的な近代主義的性格を含めて、問い直されなければならないと思われる。古民家の再生・利活用という目論見も、日本近代 150 年を経た大転換期の中で、どのような公共的意義を持つのが再確認されなくてはならないと思う。

そうしたラディカルな問い直しの機会として、この活動を育てていくことができれば、またそうした機会を学生さんたちと共有できれば、これに過ぎる喜びはない。

「ガクチカ」になりましたか？

小辻 寿規（立命館大学共通教育推進機構准教授）

＜担当プロジェクト＞

- ・草津宿本陣「年越し大作戦」実行プロジェクト
- ・草津ブランド新商品開発プロジェクト
- ・若者の投票率向上に向けた模擬投票イベント
- ・草津市×立命館 大学生のまち活応援プロジェクト



多くのプロジェクトがその活動を一定終了し、成果と課題をみなさんと共有する時期になりました。受講生のみなさんはよく頑張られましたね。ここから自身の振り返りに一踏ん張りです。

今年度の「シチズンシップ・スタディーズ」の科目において私はことあるごとに「ガクチカにしよう。」と言い続けてきました。もちろん多くの受講生のみなさんはガクチカだけでなく、「地域のことを知りたい」、「地域貢献したい」という思いで受講してくださっていることも知っていましたがあえてガクチカにしようと言い続けてきました。なぜ、そうやってきたのか。もちろん、受講生のみなさんが自分に最適な進路を選ぶための一助となれば良いという思いが一番でしたが、実はそれだけではありません。

受講生のみなさんにとって、自分自身のために科目を受講し、指定された時間（もしくはそれ以上）のボランティア活動に従事していただきたかったのです。

さまざまな社会貢献活動に私もこれまで関わってきましたが、そこで見たものは世のため人のためと言ったところで本当にそうなのだろうかと思うことがたくさんありました。もしかすると、私に対してもそう思った方もいるかも知れませんが、最初は誰かのためであったかも知れませんが、その後、名誉欲が出ること、金銭欲が出ることなども少なくありません。

その中で世のため人のためと言われても、どうなのだろうなという思いを抱く人も多いでしょう。

もちろん、そのような欲は無くとも表彰されたり、メディアから良い意味で取り上げられたり、著名人から褒められたり、審議会等の委員に選ばれたりすると何だか自分が偉い人になっ

た気がすることは良くあることです。私だって、もう少し若かった頃はそういうことがよくありました。

でも、そういう時に自分を戒めてきたことも事実です。ボランティア活動や社会貢献活動をしていても何者でもなかった頃の10年以上前の「私」と少しは社会的に評価されたと感じる「私」は同じ人なのです。その活動にどちらが尊いとかはないとこれまでからずっと思ってきましたし、これからもそうは思わないでしょう。無心で頑張っていた10年以上前の私が許さないでしょう。私は常に過去の自分と対話しながら活動しています。

そんな私が10年以上関わっているある社会活動家の方がいます。彼に「何で活動するのか？」という問いを投げかけると「自分の住みやすい社会にしたいから。」と答えられました。実は彼はこの問いに対して私が知る限りずっと同じ回答をしています。彼は「世のため人のために活動している。」などとは言いません。もちろん、彼の活動が世のため人のためになっていると感じておられる方はいます。しかし、彼は自分自身が楽しくない世界であれば、そんな世界はいらないそうです。常に彼は未来の自分のために活動しているそうです。

ガクチカは過去の自分と未来の自分をつなぐものです。過去の自分がそう動いたから今の自分があるのか、そして今の自分は過去を未来にどのように生かすのか。これまでの自分自身を振り返り未来に生かしていただけると嬉しいですよ。

プロジェクトの活動を通して得た力で一人の市民として未来を切り拓いてください。これからの活躍を期待しています。

複雑さへの感度を上げる

秋吉 恵（立命館大学共通教育推進機構教授）

<担当プロジェクト>

- ・茨木みずとわプロジェクト ～持続可能な食を考える～
- ・フードパントリー茨木 Rits プロジェクト
- ・障害者ガイドヘルパー版「るるぶ」をつくろう！
- ・団地生活の活性化 ～まちづくりの面白さを知ろう～
- ・国際理解教育外国人 サポーター派遣事業



鹿が入った田んぼで緊急の稲刈り&ハザかけ中

「シチズンシップ・スタディーズ」は、2020 教養改革によって通年科目が秋学期科目に、1 クラス 10 名前後が 30 名上限へと変化して 2 年目を迎えた。30 名上限になったことで、地域活動に最適な人数でプロジェクトを運営するために、ほとんどのクラスがプロジェクト数を増やした。いばらきキャンパスで開講する GV クラスは改革前の 1 プロジェクトから昨年度の 2 プロジェクト&2 プログラム、そして今年度は 5 プロジェクトを通して、茨木近郊地域で以下の 5 つの活動を実践した。

「気候変動の影響を受ける農の現場で持続可能な食を考え実践する」「高齢化の進む団地コミュニティの活性化に取り組む」「障がいのある子どもたちの経験を増やすためのお出かけコースをつくる」「フードロスがなくし困っている方々とシェアする場の運営を手伝う」「多文化共生を目指して国際理解教室を担う」。それぞれの活動が対峙するのは、気候変動、高齢化、社会的排除、経済的そして関係性の貧困、分断といった世界規模の社会問題が、茨木近郊で顕在化した地域課題だ。そして、実はそれぞれの課題には複数の社会問題が関わっている。例えば気候変動による農の現場の変化は、食料価格の高騰をうみ、暮らしの経費を増大させているし、日本の農業や漁業の現場は海外から働きに来てくださっている方々に支

えられている。工場や飲食店等で働いている彼らは地方都市の団地に住む人も多いが、母国であたりまえの暮らし方は日本の集合住宅が持つ規範に馴染まないこともあって、ちょっとした軋轢が生まれたりする。私と誰かを区別する要因は、障がいとか国籍とか性別とか住んでいる場所といった目に見えるものだけでなく、考え方や信条、言葉や道具の使い方にまで及び、弱者に対しては社会的排除の形で表出し、類似する力を持つ相手とは壁を作って分断を生み出す。

複数の社会問題が絡み合って表出する地域課題を、半期の活動で理解するのは難しい。自分ができるところを探し求めてもやもやしながら考え続けた学生でも、その複雑さを臆げに感じ取るのが精一杯だ。それでも、作り手が伝えやすくまとめた文章や映像を目にしてわかったつもりになっていた時より、きっとその複雑さへのアンテナの感度は上がっているのだと思う。そして、大学生として、さらに卒業後には社会人として、それぞれが暮らしていく地域で、そのアンテナが活躍するのではないかと、密かに期待している。

コロナ禍がまだ収まらない中、学生を受け入れてくださった地域の皆様に、心からの感謝と、皆様の働きが実る未来への願いを込めて。